
影の皇后

5392sisters

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

影の皇后

【Nコード】

N5093R

【作者名】

5392sisters

【あらすじ】

歴史に埋もれた皇后の話。どっからどう読んでもファンタジーでフィクションです。恋愛要素はありません、多分。残酷な表現が含まれますが、物語の進行上重要ですのでご了承下さい。

プロローグ：皇后エリザ

今ではもうすでにない大国の一つに、世界最大の大陸ティルジア大陸に存在した史上最大の帝国、バルト帝国がある。かの国の歴史を研究する上で最大の謎とされた人物の名がある。

バルト帝国第37代皇后、エリザ・マリファナ・ロン・バルト。

その高い地位にも関わらず、バルト帝国記に彼女の名が記されたのはたった三度だけであった。輿入れ、出産、そして死。そのため彼女の存在自体を疑問視する歴史学者も少なくなかった。しかし歴史書に記されたエリザ・マリファナ・ロン・バルト、その名自体が大いなる議論を呼ぶことになるのである。

彼女は、バルト帝国最盛期を築いたと言われる第37代皇帝シリウス・ロン・バルトの一の妃にして、第一王位継承者たる皇太子アルファードを産んだことにより皇后となった女性である。

シリウス王は16歳でバルト王国の王として即位するとともに次々と周囲の国々を攻め落とし、当時ティルジア大陸の東の小国にすぎなかったバルト王国を大陸一の大国へと成長させた。シリウス王が30歳のとき、バルト王国はバルト帝国へとその名を変え、シリウスはバルト帝国のその最初の皇帝としてその後約20年間君臨することになる。

エリザは元々バルト王国の隣国、マリファナ王国の第一王女であった。肥沃な土地に恵まれたマリファナ王国は、バルト王国とは当時比べ物にならないほどの国力をもった大国であった。しかし古い歴史をもつマリファナ王国は大国であるために他国から攻められることもなく平和が続き、大国の傍で小国同士のせめぎ合いを長く経

験してきたバルト王国とは戦争に対する経験値という点で雲泥の差があったのである。

大陸歴1807年、バルト王国が大国マリファナ王国に突然その牙を向け王国を攻め落としたことが、バルト戦記のその第一歩であった。

エリザが16歳のときマリファナ王国はバルト王国に攻め滅ぼされ、エリザは王族唯一の生き残りとして、当時18歳だったシリウス王の元に嫁ぐ。後に攻め滅ぼした国々から数多くの妃を娶ることになるシリウス王であるが、エリザはその最初の一人であった。輿入れから一年後、エリザはアルファードを産み、正妃エリザ・ロン・バルトとなったのである。

しかしその後、エリザの名はバルト帝国記から長く姿を消すことになる。

後に再び姿を現した時、エリザの名にある変化が起こっていた。エリザ・マリファナ・ロン・バルト、つまり、エリザのかつての姓であるマリファナの名を使うことを許されていたのである。滅ぼされた国の名を名乗ることを許された妃はバルト帝国記史上エリザただ一人であり、またそもそもバルト王国は夫の姓のみを名乗る風習を持った国であった。そのことからそれがどれほどの称号であるか想像に難くないだろう。エリザがシリウス王に深く愛されていたからだと推測する歴史学者もいないではなかったが、シリウス王の寵妃として明らかに多くの記録が残されている二の妃マルベラや十一の妃ローザは許されてはいなかった。彼女たちもエリザと同様にシリウス王に母国を滅ぼされ、人質同然に連れてこられた者たちである。

ゆえに皇后エリザの名は、バルト帝国の歴史上最大の謎とされるようになったのである。

プロローグ：皇后エリザ（後書き）

小説読んでたらうずうずしだして突発的に書き始めました。

初めて書くので意味不明な文章でも許してくださいm（――）m
しかも先は全く決まっていなかったので完結するのも不明なのです。。。

王国の崩壊（１）

マリファナ王国の首都ザルディア。その中央にそびえ立つマリファナ城の一角に、エリザはいた。城内の奥深く、下働きがたまに通るか通らないかのような人気のない場所で、エリザは影のような存在と向き合っていた。

「マリア、頼んだぞ」

「はい、お任せ下さい。必ず……」

その返事とともに、影はスルリとエリザの傍から姿を消した。

影が立ち去ったあとをじっと見つめながら、エリザはため息をこぼした。それは、もう後戻りできない状況に至ってしまったことへの煮え切れない思いが込められていた。本当はこんなこと、してはいけないのだ。なんと愚かなことを私はしているのだ。エリザが何度も、自分に問いかけた続けた言葉だった。だがもう遅い。覚悟を決めなければならないのだ。

「エリザ様……？」

物音がして、エリザははっと顔をあげ後ろを振り向いた。そこには下働きの女の姿があった。こんな場所に絶対に来るはずのないエリザの姿に、下働きは一瞬不思議そうに首をかしげ、そしてはっとして跪いた。

「も、申し訳ありません、失礼を。まさかこのようなところにエリザ様がおられるとは思わず……」

マリファナ王国では、王族の前で許可なく面を上げるとは失礼

だとされていた。爵位をもつ貴族はもちろん、王族の世話をするメイドなどは下級貴族出身の娘が多く、お辞儀をする程度で良かったが、単なる奴隷にすぎない下働きは、王族が通り過ぎるまで跪いて首を垂れる必要があった。

床に顔をこすりつけるようにしてひれ伏し震え続ける下働きを見ながら、エリザは先ほどとは別の意味でまたため息をついた。

「そのように怯えなくても大丈夫よ、罰したりなどしないわ。私の飼い猫の姿が珍しく見当たらなくて、探し回っていたらついここまで来てしまったの。仕事の邪魔をしてしまったようで悪かったわ、ごめんなさいね」

そう言いながら柔らかに微笑み、エリザはその場を静かに立ち去った。

王族に跪くのが一瞬遅れた、その程度で怯える下働きの姿は至極滑稽にうつるが、この国では「その程度」では済まないというのが現実だった。下働きの怯えは当然なのである。奴隷の命など、こちらの虫と同程度にしか考えていない王族や貴族が、大勢いるのだ。些細なことで無礼だといって罰せられた仲間たちの話を、彼女はたくさん知っているのだろう。だから王族の中でも最も立場の低く、むしろ疎まれていてもいい存在であるエリザに対してでも、彼女は怯えたのだろう。

エリザは現マリファナ国王の最初の子供であつたが、母はマリファナ国王の正妻であるエレオノラ王妃の娘ではなかった。マリファナ国王がもつ、多くの側室の内の一人の娘なら、まだよかっただろう。彼女の母親は、貴族ではなかった。もつと最悪なことに平民

ですらなかった。さきほどの下働きと同じ、昔マリファナ城に下働きとして仕えていた、ただの奴隷の女だったのである。

現マリファナ国王であるグスタフ国王の好色ぶりは、国内で知らない者などいない程有名であった。しかしそのことは、多少眉をひそめられることはあっても、さほど問題になることはなかった。子孫を残すことは国王にとって重要な仕事の一つであったし、マリファナ王国は基本的に一夫一妻制の国であったが、国王のみ、側室をとることを許されていたからである。それが貴族なら、たとえ下級貴族であったとしても問題はなかった。貴族であったなら。

グスタフ国王がエリザの母、エマに興味をもったのは、単なる偶然であった。エマはとりたてて美人でも器量がよいわけでもなく、かといってさほど不細工というわけでもない、驚くほど平凡な顔をしていた。マリファナ王国に多いこげ茶色の短い髪に茶色い瞳をもった、ありふれた容姿であった。

その日、マリファナ城では国王主催の宴が催されていた。当時まだ王子であったグスタフ国王は、酒に酔って火照った身体をさまそうと庭園にやってきた。そこで、下働きらしき女を見つける。酒に酔っていて気が大きくなっていたグスタフ王子は、何を思ったのかその下働きの背後から近づき、女を襲った。

突然襲われた女は、何が起こったのか最初分からなかっただろう。事が終りグスタフ王子がその場を立ち去るまで、ただじっと耐えるしかなかった。

その襲われた女が、エマであった。

通常奴隷たちは、宴があるときなどは、部屋にこもって姿を見せないように言い渡されている。しかしエマは、その日の昼に庭園の掃除を担当した際に落とした、母の形見である大切なハンカチを探すため、命令に背いて庭園に出てきていた。パーティーをしている部屋からその庭園までは少し距離があり、まさか貴族たちがここま

でやってくるとは思わなかったのである。この些細な不注意が、その後のエマの人生を狂わせることになった。

乱れた衣服をかき寄せ、震える足を何とか動かして奴隷部屋に戻ったエマは、今日襲ってきた男がまさかグスタフ王子であったとは思ってもしなかった。暗闇で顔の判別がつかなかったし、またたえついたとしても、エマたちのような奴隷が王族の顔を見る機会など一切無く、国王ならまだしも、王子であるグスタフの顔を正確に知ることなどできなかったからである。

きつと今日の宴に参加していた貴族の男のうちの誰かだろう。今日はちよつと運が悪かっただけ。明日からいつも通りの平凡な毎日が待っている。エマはそう考え、もう忘れよう、そう思った。

しかしエマの「ちよつと運が悪い」は、その後も何度か訪れた。エマが一人のところを狙ったように現れ、いつも突然襲われた。さすがにエマも、男がグスタフ王子であることに気付いたが、気付いたからこそ結局何も言えなかった。相手は王族である。あの日襲われたのもグスタフ王子だったのだと、エマはぼんやり考えた。平凡な奴隷であるエマの、一体何を気に入っただろう。きつとすぐに飽きる。エマはただ耐え続けた。

王子の突然の気まぐれは、じきに城中に知れ渡るようになった。

王子の父親である当時のマリファナ国王は、最悪の事態になる前に手を打とうとして、それがすでに遅かったことを知る。

お腹のふくらみは初産のためかあまり目立たず、エマも、エマの周囲の人間も全く気付かなかった。仕事中に突然お腹が痛み出し、しゃがみこんだ瞬間に、エリザはするりと産まれた。

エリザがグスタフ王子の子供であることは、誰の目にも明らかであった。グスタフ王子がエマと関係を持っていることは有名であったし、何より産まれた赤子は、マリファナ王国の王族の血をひいて

いる証である、紫色の目を持っていたからである。エマに似たこげ茶色の髪と、平凡な顔をもった赤子であった。

当時のマリファナ国王は、産まれた赤子の処理に悩んだ。亡き者にすることも考えたが、奴隷から産まれたといっても王族の子である。結局エリザは、すでにいた王子の側室である下級貴族出身の女の子供として育てられることになった。産まれた子供が男児であったなら、本当に亡き者にされていたかもしれない。しかしエリザは女児であった。マリファナ王国では女性に王位継承権はない。だからいずれ他国に嫁がせるなど、政治的に利用価値も出てくるだろう。そう判断され、生かされた。

エリザの出自は有名であったから、父であるグスタフ国王からも育ての母からも見向きもされず、周囲からも半端な王族として蔑まれて育った。エリザにとって、蔑まれることは日常であったのである。

見られたか。自室に戻りながら、エリザは先ほどの下働きの姿を思い出していた。とつさに言い訳をして立ち去ったが、何か疑念をもったかもしれない。そう思ったが、エリザは大して心配してはいなかった。これから起こることに比べたら、大したことではない。考えなくてはならないことは他に山ほどあるのだ。

王国の崩壊（1）（後書き）

小説を書くのって難しいですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5093r/>

影の皇后

2011年10月7日23時36分発行